

横山内科 院内新聞

第23号
平成23年
12月

十一月十四日は、『世界糖尿病デー』です。日本だけでなく、世界的に増加する糖尿病に対する知識や理解を深めることを目的とし、世界各地で様々なイベントが行われています。道内でも札幌テレビ塔や時計台、釧路市生涯学習センターなどがテーマカラーのブルーにライトアップされました。



2011年
ポスター
コンクール
受賞作品

平成二十三年十一月十四日に行われた患者講習会では、日々の診療でなかなかゆっくりとお話することのできない、糖尿病やインクレチン製剤について横山院長が講演しました。

「糖尿病とインクレチン」

院長 横山 宏樹

現在では、皆様のご両親の時代よりも、糖尿病の治療はずっと良くなっています。治療薬の種類は増え、インスリンを打つ注入器も優れたものになりました。正しく治療を続けていけば、糖尿病でない人と同じように人生を楽しむことができます。

高血糖の原因

糖尿病患者さんの体の中では、インスリンの分泌が悪い「インスリン分泌不全」と、インスリンが血糖を下げるのにうまく働けない「インスリン抵抗性」の二つの要因が絡み合って糖尿病をつくっています。

血糖上昇の原因には、肥満、過食、運動不足、ストレスなど自分で調節可能な因子があり、一方で加齢や遺伝的な要因など自分では調節不可能な因子も関わっています。



このため、同じ生活を続けていても年齢を重ねることによって、膵臓のベータ細胞（インスリンを分泌する細胞）が減り、血糖コントロールが徐々に悪化し得るのです。

インクレチンとは？

インクレチンは、食事摂取に伴い消化管から分泌され、膵臓ベータ細胞からのインスリン分泌を促進する消化管ホルモンの総称です。現在GIP（ジーアイピー）とGLP-1（ジーエルピー）の2種類が知られています。GLP-1はインスリンの分泌を促進させて血糖を下げるほか、脳に作用して食欲を抑える、胃や腸の動きをゆっくりさせる、膵臓を保護するなど様々な内臓への効果を持ちます。

2型糖尿病へ挑戦する鍵は？



1. **2型糖尿病は緩徐進行性(ゆっくりと徐々に進んでいく)の疾患です。**その理由は、
 - ・ インスリン分泌細胞(ベータ細胞)の数や働きが低下していく
 - ・ 血糖コントロールは自然に悪化していく
 - ・ 心血管イベント(心筋梗塞・脳梗塞など)のリスクは徐々に増強していく
2. **2型糖尿病の血糖コントロールをする中で、患者さんは、薬物治療による低血糖、体重増加、また食事、運動や薬物療法さらに自己血糖測定などたくさん治療が込み入っていることに直面します。**

インクレチン関連製剤は、これらを克服する治療薬のひとつかもしれません

インクレチン関連製剤

インクレチンは腸から分泌されて数分のうちに、DPP4(テーパーピーフォール)という酵素に分解されその働きを失ってしまいます。このDPP4という酵素の働きを阻害してインクレチンの分解を抑える作用をもつ薬がDPP4阻害薬という飲み薬です。そして、元々糖尿病の方で少なくなっているインクレチンを、分解されにくい形にして注射するGLP-1様製剤があります。

インクレチン関連製剤は、血糖の値に合わせて働く血糖依存性という性質があるので、単独で治療に用いられる場合には低血糖を起す心配がありません。また、いくつもの治療薬で見られ

る体重増加の副作用がありません。特にGLP-1様製剤では食欲抑制のため体重減少を期待できます。海外では痩せ薬として使われてもいます。

最近の流れとして、異なる作用を持つ二種類の薬を一つにまとめた配合錠が多く発売されており、DPP4阻害薬も例外ではありません。配合錠への変更によって薬の数が減ることは毎日の内服の負担感が減るだけでなく、薬代も安くなるメリットがあります。

院長より

糖尿病の新薬がどんどん出てきています。上記“鍵は？”に掲げている事項に対して、より良いと考えられる薬剤の創出ラッシュです。長期的な安全性に関し

ては、最低十年はたたないとわかりません。しかし、“今、体を大切にしたい”という発想も、また人が生きる上で極めて大事なことです。糖尿病が無くなれば良いのですが、現実を直視して、皆様たくましく生きるように、手に手を携え渡って行きましょう。

編集後記

冬の到来です。今年も残すところあとわずかとなりました。私はやはり大震災が印象深く、いろいろなことを考えるきっかけとなりました。どうかみなさん、よい笑顔でまた来年お会いしましょう。

第三十二回患者講習会は平成二十四年二月の予定です。皆様のご参加を心からお待ちしています。

